

今朝も皆さまとともに主を礼拝できますこと感謝します。先週は急に寒くなり、秋を通り越して冬の訪れを感じるような気候となりました。寒暖差の激しい時、皆様のご健康と日々の歩みが続けて守られ支えられますようにお祈りしています。今朝は月に一度の機会として、年間聖句にちなんだ聖書の箇所からともにみことばに聞いていきます。今年の年間聖句は詩篇119篇105節です。

あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。

これまで、聖書を土台として生きていくことをともに教えられてきました。みことばに日々親しみ、みことばを物事の判断や行動の基準としていくこと。そして前回、石の心である私たちの頑なな心が、神さまによって肉の心、柔らかい心へと変えられていくこと。聖霊なる神さまの御業によって私たちはみことばに聞き従うことができるようになるという、聖書の約束とともに覚えました。今朝はそんな私たちの人生の土台であり足のともしび、道の光であるみことばを宣べ伝えていくこと。福音宣教についてともにみことばから教えられていきたいと思ひます。

みことばを宣べ伝えなさい

今朝のみことばはテモテへの手紙です。この手紙は今礼拝で読んでいるエペソ人への手紙を書いたパウロが、若い伝道者テモテに向けて送った手紙です。テモテはエペソの教会を牧会していた人物です。今朝の箇所でパウロはテモテに、みことばを宣べ伝えなさいと語っています。これは伝道者パウロが若い同労者のテモテに語った言葉ではありますが、特別に伝道者だけに語られている事柄ではありません。私たちイエスさまにある者全てが、この福音を語ること、みことばを宣べ伝える働きに召されています。今朝はともにそのことを覚えていきたいと思ひます。2節。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

みことばを宣べ伝えなさいとパウロは語ります。みことばを語ること、人々に伝えること。それが私たち教会、キリスト者に与えられている大切な使命です。私たちは日々みことばによって養われ支えられ、励ましや慰めを受けています。みことばから教えられ戒められ、歩みを正されていくようなこともある。みことばを日々受けて歩む私たちは、みことばを宣べ伝えていくようにと召されている。それが聖書の教えていることです。福音を語り神さまの愛を語り、聖書に記されている神さまの恵みを証していく。イエス・キリストの十字架による罪からの救いと、永遠のいのちの望みを人々に伝えていく。そのような歩みへと私たちは招かれ導かれているのです。

イエスさまはこう言われました。今朝の招きの言葉、マタイの福音書28章18-20節。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」

ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを受け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

大宣教命令と呼ばれる箇所です。私たちといつもともにいてくださるイエスさまが弟子たちに命じられたこと。私たちに願っておられること。それはあらゆる国の人々を弟子としなさい、ということでした。信じた人に洗礼を受け、イエスさまが命じられたことを守るように教える。キリストの教会はこの命令に従って2000年の間活動してきました。このイエスさまの命令に従って福音を宣べ伝えた人たちがいたからこそ、私たちは今イエスさまを信じ教会につながる恵みをいただいている。そのように言えるでしょう。

そして同じ出来事を記すマルコの福音書にはこうあります。マルコ16章15節。

それから、イエスは彼らに言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」

すべての造られた者に福音を宣べ伝える。みことばを語っていく。それが私たちに与えられている大切な働きであるということを今朝はともに覚えたいと思うのです。みことばを宣べ伝えること。大切な聖書の言葉を私たちの内に留めるのではなく、周りの人々にこの世界に宣べ伝えていくことを私たちは大事にしていきたいと思います。

時が良くても悪くても

そして時が良くても悪くても、と今朝のみことばでは言われていました。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。どんな時も私たちはみことばを宣べ伝えていく。そうパウロはテモテに教えます。時が悪くてもというのは、福音を語ることのできない時代や社会となってもということです。この節の後にはこうあります。3-5節。

というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。

けれども、あなたはどんな場合にも慎んで、苦難に耐え、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい。

福音を語ることに苦難が伴うような時が来る。人々が健全な教えに耳を貸さなくなるような時代になる。そんなことをパウロは予告しました。そんな悪い時となったとしても、私たちは誠実に真理を語り続けていく必要があるとパウロはテモテに教えたのです。事実この日本においてもキリストを信じたり福音を語ったりすることが禁じられた時代がありました。またこの世界には、まだ少なくない数の国で福音を語ることが認められていない。そんな状況もあります。そういう中でみことばを宣べ伝えることの難しさを思います。

またそのような社会や国の問題だけでなく、人に福音を語ることが難しい状況を私たちは味わうことがあります。みことばを語ろうとすると拒否されたり批判されたりしてしまう。あの人に福音を語りたいけれども受け入れてもらえない。そんな意味での「悪い時」というのもあると思います。そのような中でもみことばをしっかりと宣べ伝えるように、時が良くても悪くてもちゃんとやるようにと今朝のみことばは私たちに語るのです。迫害や福音を語ることが憚られるような悪い時があっても、人からの反対や非難にあったとしても、私たちは誠実に真実にみことばを語り続ける者とされたいと思います。

そして改めてここで時が良くても、と言われている意味を思わされます。私は大学生の時に、この時が良くても悪くてもという箇所からメッセージを聞いたことがありました。もう20年近く前の話で誰が話していたのかどこで聞いたのかすら覚えていないのですが、それでもその時にメッセンジャーの方が言ったことを私は今でもよく覚えています。それは私たちは良い時ほど宣教しない。時が良いと、みことばを語ろうとしない、そんなことはないか、ということでした。時が良くても。すなわちこの人にはまた次の機会に語ることができるからいいや。語ろうと思えばいつでも語れるから、今は言わなくてもいい。そんな風に思ってしまうことが私たちにはあるのではないか。そんなことを改めて思われるのです。良い時でも、いや良い時だからこそ、私たちはみことばを語ることが怠ってしまう。今話すと相手は迷惑かもしれないから、今度そういう機会が来たら話そうと、そんな風に語るべき時を先延ばしにしていることが私たちにはあるのではないか、ということです。

次の機会というのが本当にあるのか、それは誰にもわからないことです。新型コロナウイルスの影響で世界中が大混乱になった時、私たちはまさにそういうことを経験したと思います。いつでも会えると思っていた人に会うことができなくなった。いつでもみことばを語れる、いつでも伝道できる。そう思っていた人に福音を伝えることができなくなった。そんな経験を私たちはしました。

そういう中ギリギリの時に福音を語る機会が与えられ、救われる方が起こされた。この八千代聖書教会にも、コロナ禍に福音を受け入れ救いに導かれた方々が何人かおられました。病床にあって、今この時しかない、という時に福音を語る機会が与えられ、そこで福音を信じた方もいらっしゃいました。それは本当に神さまの憐れみというほかないことです。しかし私たちは、いつでもみことばを語ることができるとは限らないこと、良い時がいつまで続くのか誰にもわからないのだ、ということ覚えをきまえて、時が良くても悪くてもしっかりと福音の宣教に励む者とされたいのです。

今日の1節にはこうありました。

神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。

パウロはテモテに対し、キリスト・イエスの御前で厳かに命じます、と語りました。その現れと御国を思いながら。これはイエスさまが再び来られる再臨の時を指していると考えられます。イエスさまはやがて再び来られる。この世界の終わりの時が来る。その再臨を思いつつ、パウロはテモテに語りました。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、しっかりやりなさい。明日、または今日再臨が来るかもしれない。そんなある種の切迫感を持ってパウロはテモテにこの言葉を伝えたということです。私たちもまた、時が良くても悪くても、明日再臨が来ても良いように、福音を宣べ伝えていく。どんな時でも神さまのみことばを誠実に大胆に勇気を持って語っていくことを大事にしたいと思います。

忍耐の限りを尽くし

一方で、みことばを宣べ伝えることには忍耐が必要であるということも覚えていたいと思います。もう一度2節。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

忍耐の限りを尽くし、とあります。私たちがみことばを宣べ伝えるには忍耐が必要だということです。みことばを宣べ伝えるのは、単に聖書の話を一方的にしてそれでおしまい、ということではありません。あの人には一回福音を語ったから、あとはどうなろうと関係ない、ということでもない。みことばを語り続けること、たとえその時は聞いてもらえなくても諦めず忍耐をもって福音を伝え続けることが私たちには求められています。さらに絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさいと4つの言葉でみことばを語ることが表現されています。それだけいろいろな形や方法で私たちはみことばを宣べ伝える必要があるのだ、ということです。聖書に記されている神さまのみことと真理を懇切丁寧に、あらゆる時にあらゆる仕方で語っていくことがここでは命じられています。神さまの愛と真実を証し、それに応えて生きることを教え続けていく。聖書の教えとは異なる価値観や考えが満ちているこの地において、聖書的な生き方、神さまのみこととかなった生き方を示していく。言葉や行いを通して、あらゆる方法や機会を用いて神さまの望む生き方を証していく。それが私たち教会の務めだということです。

あらゆる方法や手段を用いて、私たちはみことばを語り続けていく。それぞれに遣わされる所で、神さまの愛と真実を証し、その行動や言葉をもって神さまのみこととを現していく。そのために私たちはこの地に生かされています。みことばを宣べ伝え聖書の教えを語るために、私たち八千代聖書教会はこの地に建てられている。そのことを覚えていたいと思うのです。

イエスさまはこう言われました。マタイ5:13-16

あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。

あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、明かりをともして灯の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。

このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。

地の塩、世の光としてこの地を歩いていくこと。遣わされる地でみことばを宣べ伝え、言葉と行いをもって福音を証する務めをイエスさまは私たちに託してくださっています。みことばを宣べ伝える。福音を携えてそれぞれの地に、この地域に出て行くことを私たちは大切にしていきたいと思います。私たち八千代聖書教会がこの地において福音を証しみことばを宣べ伝える存在としますます用いられていくように、私たち一人ひとりがそれぞれ遣わされる職場や学校、家庭や地域においてイエスさまの愛を伝える存在となることができるように。私たちは祈り励む者でありたいと思います。

お祈りをいたしましょう。「天のお父さま。みことばをありがとうございます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。あなたから受けているみことばを大胆に、喜びと情熱を持って宣べ伝える私たちとどうかならせてください。時が良くても悪くても、忍耐の限りを尽くして。誠実に真実に福音宣教に励む八千代聖書教会、私たち一人ひとりとかならせてくださいますように。今週もまた、それぞれに遣わされる地で出会う人々、私たちの家族や友人、地域の方々に言葉や行いを通して、あらゆる方法や機会を用いて、あなたの恵みと真実を証していくことができますよう、聖霊の力により励まし導いてください。みことばに感謝して、主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。」